

号長 ひとりと

30

斉藤 譲

毎朝きまった時間になると、わが家の愛犬「チーコ」は「キュン、キュン」と鼻をならして、散歩にいきたいとせがむ。このチーコは、捨てられていた子犬を拾って育てた七才になる雑種の牝犬である。一年ほど前に大病を患い、今では全く目の見えないかわいそうな身体障害犬である。犬猫病院に連れていった時は、既に手遅れの状態であった。肝臓病による視力障害とのことであったが、婦人科系の疾患もひどかったので、手術を受けることになった。先生も、久し振りに大きな手術をしたというほどの大手術で、手術は一時間半にも及んだ。幸い元の元気な

姿に戻ったが、目だけは始何ともしがたく、日が経つにつれて白っぽく空になってしまい、今ではまるでガラス玉のような目玉が二つ、丸い顔から飛び出している。その異様な姿は、痛みや不自由さを訴えることのできない畜生だけに、いつそう哀れである。私の母親は、「チーコはかわいそうに。お前の身代りになったのだよ。」とよく私に言う。当時はよく酒を飲んで、二日酔いで苦しんだり、血液検査で肝臓の脂肪数値が高いなどといわれていた私にとって、この一言はずい分身にこたえた。ことによると、それは本

二人の小道

当のことも知れないという気がしてきて、そんなチーコが殊更に不憫でならない。このチーコがせがむのだから、無視するわけにもいかず、いつもうっとおしき半分で重い腰を上げるのである。朝の散歩は、山の上の畑中の小道を四、五十分かけて歩くことにしている。これが私の日課であり、また、はずかしながら、

唯一の運動でもある。台地に出るまでには、少し坂道を登らなければならぬ。チーコは、俗にいうクリ虫のように肥えていて、動作が緩慢になっているので、坂道は苦手のようである。日頃の運動量が少なく、おまけに下腹が大部出はじめた私にとっても、短いとはいえ坂道は苦痛である。

私が「よいしょ、よいしょ」と心もとなない声を出し、尻を後へおとして大儀そうに足を運べば、その後をチーコが、これもまたさも辛そうに「ゼイ、ゼイ」と息を切らし、縫いながらついてくるのである。振り返ると、昇りはじめたばかりのしつとりとした朝の太陽が、滑稽な二つの姿を影絵のように坂道に映し出している。

道に登りつめて台地に立てば、そこを支配する朝の静寂と清澄な空気が、爽やかに心に沁みできて、すべての雑念は払拭され、新たな何ともいいよくの無い充実感が、潮のごとく漲ってくるのである。小道を進めば、昨日までうす紫の可憐な花を咲かせていた馬鈴薯畑が、今日は掘り起こされて

黒土の空畑となり、芽を出したばかりの針のような葱の苗が、瞬く間に太く逞しく伸びていく姿、摘み取りを終えたばかりの茶畑に、たちまちにして始まる力強い新緑の芽吹きなどの様子は、しばし言を忘れるほど感動的である。私は、自然と対面するこのわずかな時間の中で、もの想いに耽り、懸案の問題を考えたりする。だから、毎日通うこの小道は、今の私にとって掛替のない元気回復の道であり、思索の道である。これからも、暗闇に生きるチーコを労りながら、長くこの小道を歩き続けたいものだと思っている。

